本日は、***Durefare***（デュルファール）による

「バロック音楽の旅　第１０回記念コンサート」 へ

お越しくださいまして、誠にありがとうございます。

本日演奏いたしますほとんどの作品は、前回の公演の際、

お客さまがアンケートにお書き込みくださいましたお声に

お応えするかたちで、選ばせていただいております。

今宵も、デュルファールならではの響きを

お楽しみいただければ幸いです。

これからも、***Durefare***（デュルファール）を、

どうぞよろしくお願い申し上げます。

Durefare
（デュルファール）

菊　池　か　な　え

外　川　陽　子

作　品　解　説

ヴェネツィア生まれの**アルビノーニ**は、自ら”ヴァイオリン音楽家”と称し、音楽を楽しみ、さらに、楽しませる愛好家である事をモットーとしていて、彼の作品は特にアマチュア音楽家に人気があったといいます。裕福な紙商人であった父が亡くなった時、長男の権利と義務を放棄して音楽に専念し、イタリアではコレッリやヴィヴァルディと並ぶ人気の高さを誇っていました。彼の旋律に対する才能は異論なく、美しい楽想は独自の魅力となっています。J.S.バッハは、アルビノーニの Op.1 の主題による 4 曲の鍵盤器楽用フーガ(BWV946,950,951,951a)を作っており、教材などとしても使っていました。

プラッティは、ヴェネツィアで音楽を学び、その後ヴュルツブルグへ赴き、そこで職を得ています。司教の元で歌唱教師、作曲家として、またオーボエ、ヴァイオリン、チェンバロ、フルートなどの演奏もしていました。彼の作品を見ていくと、バロック様式からギャラント様式への推移、前古典派世代の領域に移りゆく様を感じ取ることが出来ます。フルートソナタでは、速い楽章の活気に溢れたリズム、広がりのある美しい旋律に彼の特徴を見いだせるでしょう。

クヴァンツは、プロイセン王フリードリヒ 2 世の宮廷音楽家であり、王のフルート教師、作曲家として名を残しています。彼の重要な著書の一つである「フルート奏法」は、今年新たに改訂版が出版されました。フルートに関することだけでなく、当時の演奏習慣、音楽的環境などを知ることが出来、また単なる音楽家ではなく、真の音楽家を目指したクヴァンツの考えや想いが垣間見れて興味の尽きない内容となっています。本日取り上げる作品は、フルートとオーボエ、通奏低音のためのソナタ。お客様のリクエストにより、デュルファール編でお届け致します。

スナイエは、1710 年に 10 曲からなるヴァイオリンソナタ第 1 巻を出版しています。今晩はその中に含まれる、フルートで演奏可能と書かれた曲を取り上げますが、ミュゼットまたはヴィエールのためのソナタとしても異なる調性による同じ作品があります。彼は、国王の 24 人のヴァイオリン合奏団の一員であり、イタリア様式の要素を取り入れたフランスのヴァイオリニスト兼作曲家として活躍しました。

ブラヴェは、木工旋盤職人の家に生まれ、ろくろ職人の修行を積みながら独学で楽器を演奏するようになって行きました。特にフルートの腕前は抜群で、当時の人々の賞賛の言葉がたくさん残っています。クヴァンツの「フルート奏法」の中にもブラヴェのフルート演奏についての記述があります。また当時パリでの、ヴァイオリンのルクレールやスナイエとたびたび共演した記録が残されています。Op.2 はクレルモン伯爵の愛人ブイヨン公夫人に捧げられており、イタリアとフランスのスタイルを融合させる試みが見られます。

ルクレールは、フランスのヴァイオリニスト、作曲家、そして舞踏家でもありました。Op.1(ヴァイオリンソナタ第 1 巻)は、1723 年にパリで出版されました。この曲集で独創性を認められます。4 巻あるヴァイオリンソナタ集の中に「フルートでも演奏可能」というコメントが書かれている作品が 9 曲あります。本日は、1 巻よりその中の 1 つを演奏いたします。